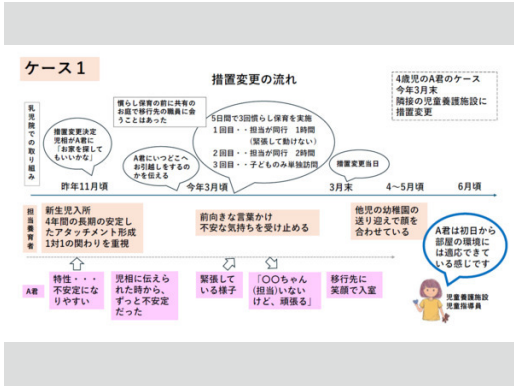


2025年度 研究成果報告書

所属機関名	東京大学大学院
申請者氏名	森末 一代
研究課題名	乳児院入所児の社会情動的な発達と支援策の検討：措置変更に焦点をあてて

調査対象			
ケース	性別	乳児院への入所年齢	移行先
1	男A	0歳0ヶ月	乳児院A
2	男A	1歳0ヶ月	乳児院A
3	男B	1歳0ヶ月	乳児院B
4	男C	0歳0ヶ月	乳児院B
5	男B	0歳0ヶ月	乳児院C
6	男B	1歳0ヶ月	乳児院C
7	男H	2歳7ヶ月	乳児院C
8	男M	1歳2ヶ月	乳児院C
9	男B	0歳2ヶ月	乳児院D
10	男A	2歳7ヶ月	乳児院E
11	男A	0歳0ヶ月	乳児院F
12	男B	2歳7ヶ月	乳児院F
13	男C	0歳11ヶ月	乳児院G
14	男A	0歳11ヶ月	乳児院G
15	男B	0歳0ヶ月	乳児院G
16	男C	0歳0ヶ月	乳児院G
17	男A	2歳0ヶ月	乳児院H
18	男C	1歳2ヶ月	乳児院H
19	男D	2歳7ヶ月	乳児院H

調査対象



措置変更の流れ

乳児院と移行先との支援のつながりについての検討	
乳児院による支援	乳児院による支援についての移行先(児童養護施設)の職員・重親の語り
慣らし保育	場を見て、職員の様子を見て、名前を覚えていくのが最優先だということになります。(児童養護施設d・児童指導員)
情報の引き継ぎ	A君の特性、日常生活の自立度、服装とか通院・健康面の情報はすぐ役に立ちました。(児童養護施設a・児童指導員)
アフターケア	安定したタイミングで数ヶ月経ってからのほうがいいかな。(児童養護施設a・保育士)

乳児院と移行先との支援のつながりについての検討

【研究の概要】

本研究では措置変更の実施前後にかけて子どもがどのような発達を辿るのかを縦断的な視点で捉え、子どもの社会情動的な発達の促進に有効な支援について明らかにすることを目的とした。児童福祉領域における「措置変更」を「アタッチメント対象との分離」という心理学の視点で捉え直し、措置変更の前から後にかけて同じ子どもを対象とした調査を行うことが本研究の独自性である。調査協力施設は移行前の乳児院8、移行後の児童養護施設9、里親4、障害児入所施設1であり、19ケースの承諾を得、14ケースは今春移行、5ケースは延期となった。移行期の子どもの発達の変化を捉えるために①SDQ<情緒面>、②遠城寺式乳幼児分析的発達検査、③ABCLアタッチメント行動指標を用いて、移行前から移行後にかけて全5回、心理士に評価を依頼した。また、移行期の支援内容を把握するために乳児院および移行先の養育者を対象に全4回、半構造化面接を実施中である。分析においては、移行期の子どもの様子、それに対する担当養育者の関わりについての語りに着目し、緩やかな移行を実現し得る要因について検討した。さらに発達の変化を捉え、発達の停滞や退行と語りの内容を照合し検討を行った。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

19ケースのうち、今年3月末に乳児院から隣接の児童養護施設に措置変更した4歳児A君のケース1についての分析結果の詳細を示す。移行から2か月が過ぎた今年の6月頃、移行先の児童養護施設の職員に3回目のインタビューを行ったところ「A君は初日から移行先の部屋の環境には適応できている」との語りが見られた。つまり、移行当日において、A君には大きく崩れた様子は見られず、比較的緩やかに移行できたケースであった。

その要因については乳児院の担当養育者への1回目と2回目のインタビューより、以下のように考えられた。

まず、A君は新生児入所であり、入所後4年間という長期間に渡り、担当養育者と過ごし、担当養育者への安定したアタッチメントを形成していた。また、A君は不安定になりやすい特性をもっていたが、担当養育者は安定したアタッチメントを形成するために1対1の関わりを重視していた。そのようななか、移行日より5か月前の昨年11月頃に児童相談所の職員が、A君本人に「お家を探してもいいかな」と聞くといったことが行われた。A君はそれを伝えられた時から、しばらくの間、ずっと不安定な様子であったことが語りにより示された。今年1月頃の心理指標の評定結果においても情緒の不安定さが示されており、この点は語りの内容と一致していた。

そして今年3月の初め頃にA君に「いつどこへお引越しをするのか」を伝え、5日間かけて、3回ほど移行先への慣らし保育を実施した。1回目は担当養育者も同行し移行先で1時間滞在したがこの時のA君は最初、緊張して動けない様子であった。2回目も担当養育者が同行し2時間くらい滞在した。3回目はA君のみ単独訪問した。

こうした移行期のA君の不安や緊張に対し、担当養育者による、どのような働きかけがあったのか、また、A君に安心感を与えるためにどのような支援が有効であったのかについて検討した。

まず、担当養育者の働きかけであるが、移行前の安定したアタッチメント形成に加え、移行の準備期間に、A君の緊張した不安な気持ちを受け止め、前向きな言葉をかけるとともに、もし不安だったら、その気持ちを話してくれていいということをA君本人に伝えていたという。その後、移行日が近づき、A君は自分から「〇〇ちゃん(担当の先生)いないけど、頑張る」と言えるようになり、3月末の措置変更当日にはA君は移行先の部屋に笑顔で入室できるまでに変化していた。

(Bowlby, 1969/1977)によれば、乳幼児期の子どもの安定したアタッチメント形成は、自他信頼の基盤の形成につながる。つまり、A君には担当養育者との安定したアタッチメントを通じて、自分を信じる力や他者を信じる力が育まれたと推測される。A君に育まれた自他信頼の基盤が「〇〇ちゃん(担当)いないけど、頑張る」といったA君自身の前向きな言葉や、移行当日、隣接の移行先に笑顔で入室できたことに関連していると考えられる。

また、担当養育者のA君の気持ちに寄り添う関わり方もA君の心理的な安定にポジティブに作用していた可能性が考えられる。

このほか、移行先の児童養護施設が隣接のため、慣らし保育を開始する前の段階から、同敷地内でA君と移行先の養育者が顔を合わせることが複数回あったことや、移行後、他児の幼稚園の送り迎えで乳児院の担当養育者とA君が数回、顔を合わせる機会があるといったことから、乳児院の担当養育者から移行先の児童養護施設の養育者への緩やかなアタッチメント対象の移行過程が、A君の心理的なダメージを軽減させた可能性も考えられる。

さらに移行先の児童養護施設の養育者の「子どもの安心安定・大人とのアタッチメント形成を最優先にし、移行後、A君と1対1の関わりを心がけ、安心感を与えるようにした」の語りもあり、アタッチメントを重要視するといった両施設間の支援方針が一致していることもA君の新生活への適応のしやすさに繋がっている可能性が考えられる。移行後の安定したアタッチメント形成は移行前の乳児院における安定したアタッチメント形成の上に成り立つ支援でもある。

したがって、移行前の乳児院における安定したアタッチメントを通じて、子どもが形成した自他信頼の基盤は、措置変更を経験する子どもの心理的な支えとなり得、さらにはそれが移行後の新生活への適応のしやすさにもつながっており、移行後の子どもの発達を支え促し得る可能性が考えられる。この点については、複数の他のケースにおいても共通性がみられ、本調査結果は「移行前において担当養育者へのアタッチメントを通して形成された自他信頼の基盤が、子どもの社会情緒的な発達をより良好に進行させ、分離の受容や移行先の養育者との良好な関係性の構築を促し得る(森末, 2025)」を裏付けている。

以上の点を踏まえ、本研究において、移行期における子どもの発達に有効な支援について以下の4つの示唆を得た。まず、第一に移行前における乳児院の担当養育者への安定したアタッチメント形成が乳児院を退所し、措置変更を経験する子どもにとって極めて重要な支援であること、第二に移行の準備期間、乳児院の担当養育者による、子どもの気持ちに寄り添う関わりは不安定になりがちな子どもに安心感をもたらし得ること、第三に、措置変更により、子どもがそれまでのアタッチメント対象と急な分離を経験するのではなく、緩やかに対象移行できることは、子どもへの心理的な負担を軽減させる可能性があること、第四に移行前と移行後の施設間における支援方針の一致は移行後の子どもの新生活への適応につながる可能性があるといった点である。

2. 今後の研究の見通し

今後はすべてのデータを収集後、移行期の子どもの発達の変化と支援との関連について詳細な分析を行う予定である。その際、慣らし保育や情報の引き継ぎといった移行期の支援実践だけでなく、養育者による移行期の子どもへの直接的な関わり方や、移行前にどれだけ安定したアタッチメントが形成されていたか、アタッチメント対象の移行過程と環境移行との関連、移行前と移行後の両施設間の支援方針などにも着目し、上記の4つの示唆についてケースごとに検討を行っていく。

また、本研究の社会的な意義として、アタッチメント対象との分離を経験する子どもの心理的な負担を軽減させ、分離後の子どもの発達に有効な支援について明らかにし、それを現場へのフィードバックすることにより、子どもにとってのスムーズな移行の実現につなげていくことが可能になると考えられる。

さらに、今後の研究の見通しとして以下のように考えられる。

昨年、実施した全国の乳児院を対象とした措置変更時期の支援に関する実態調査により、乳児院において「乳児院でやってきた支援が移行後の子どもの発達や適応にどのように役に立っているのか知りたい」といった現場の声・要望があることが明らかになった。そのため、乳児院と子どもの移行先との「つながり」をより強化していくこと、措置変更

の「前」と「後」の子どもの育ちを連続して捉える視点をもつこと、移行前から移行後にかけて行われている支援の連続性についての検討が必要と考えられる。

その過程で、乳児院で実践されている支援がなぜ子どもにとって重要であるのか、その根拠を明らかにすることで、支援についての施設間における共通理解や共通認識に繋げていくことが期待できる。もし、施設間において支援についての共通理解や共通認識が深まれば、確実にそれは支援のやりやすさにつながっていくものと考えられる。そこで、本研究においても、移行前の乳児院と移行先における支援のつながりに着目し、上記のケース1を含む、現段階でデータ収集を終えているケース検討の結果をもとに、移行前の乳児院で行われている支援について「移行先がどのように感じているのか」の検討を行ったところ、ケース間でいくつかの共通性がみられた。

まず、情報の引き継ぎについては、「A君の特性、日常生活の自立度、服薬とか通院・健康面についての乳児院からの情報はすごく役に立ちました」の児童養護施設職員の語りや、委託後の里親の「具体的なRちゃんへの伝え方や関わり方・好きなキャラクターの情報がとても役立ちました」の語りから児童養護施設の職員あるいは里親が乳児院からの情報は移行後の生活に役に立っていると感じていることが示された。その一方で「体重の推移とか身長の推移とか、どうしてもC君だけの情報がメインになってしまって。保護者への関わり方とかの情報も欲しかった」や「A君の幼稚園での過ごし方の情報が欲しかった。行事で緊張する様子は幼稚園の先生から初めて聞きました」といった語りのように、移行先の児童養護施設が子ども本人の情報だけではなく、子どもを取り巻く環境や家族など子どもの周囲の情報も欲しいと考えていることも示された。

また、移行前の慣らし保育については「慣らし保育は移行先にどんな職員がいて、他にどんな子が住んでいるのかを知ることができるので、すごくよい機会だと思う」といった語りから、児童養護施設の職員が慣らし保育は子どもが移行先の先生や他児の様子、部屋などの環境を実際に見て慣れるために非常に重要であると認識していることが示された。

さらに、アフターケアについては「安定したタイミングで数ヶ月経ってからがいいのかな」、「今、幼稚園の慣らし保育が始まっていて、立て続けにC君の中で環境変化がある。アフターケアを先延ばしにしている感はすごく申し訳ないんですけど、今、頑張りどころで」の語りのように、児童養護施設の職員が、アフターケアについてはタイミングが重要であると感じていることが示された。

このように移行期の支援の有効性、重要性および課題について、ケース間における共通性を見出し、それを明示し、移行支援についての施設間における共通理解につなげていくことが今後の重要な課題と考えられる。その一方で、例えば、障害児のケースのように、療育ケアを伴う移行支援など、個別性に配慮した移行支援のあり方についても、今後、十分に検討していく必要があると考えられる。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

日本発達心理学会 第37回大会 ポスター発表『乳児院における措置変更時期の子どもへの支援策の検討～児童養護施設、里親委託、障害児入所施設への移行に焦点をあてて～』森末 一代（東京大学大学院）遠藤 利彦（東京大学大学院）2026年3月3日